

教育効果を相互に高める組織化されたスタートカリキュラムの事例研究：園からの連続性を生かした小学校全体で取り組むカリキュラム・マネジメントの可能性

著者	加藤 達也, 島田 桂吾
雑誌名	静岡大学教育実践総合センター紀要
巻	29
ページ	188-195
発行年	2019-03-27
出版者	静岡大学教育学部附属教育実践総合センター
URL	http://doi.org/10.14945/00026368

教育効果を相互に高める組織化されたスタートカリキュラムの事例研究 —園からの連続性を生かした小学校全体で取り組むカリキュラム・マネジメントの可能性—

加藤 達也

(静岡大学教育学研究科教育実践高度化専攻)

島田 桂吾

(静岡大学大学院教育学領域)

A Case Study of an Organized Start Curriculum to Mutually Educational Effects Possibility of Curriculum Management to tackle by the entire elementary school making use of the continuity from Pre-school

Tatsuya Kato,

Keigo Shimada

Abstract

This article addresses the Start Curriculum that is drawing attention in "Connecting with Early Childhood Education and Enriching Education as a whole in lower grades". Based on the current situation that the number of educational sites leading up to the formation and implementation has remained a few, Case I, the system in which all grades are related to the first grader, and the case II Cross exchanges between older children and fifth grader at utilizing comprehensive learning time. We focused on the two Efforts, focusing on the entire Start Curriculum at the case study school, and examined the educational effect using the case study method. As a result, not only the Start Curriculum for the first year students, but also the first graders centered on each other, including the other grades and children, multilaterally and mutually increase educational effect and at the same time lead to organization of the Start Curriculum. And the starting curriculum was included in the curriculum management of the school as a whole in the future, suggesting that there is a possibility of improving the educational effect to the whole school and Pre-school.

キーワード： スタートカリキュラム カリキュラム・マネジメント 組織化 幼小接続

1. 課題の設定

2017年度に新しい学習指導要領・幼稚園教育要領・保育所保育指針が告示された。新しい小学校学習指導要領総則では、「幼児期の教育との接続及び低学年における教育全体の充実」という項目が初めて設けられ、小学校では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」以下、「10の姿」）」を踏まえた指導を工夫することが示された。つまり、より具体的な姿をイメージできるようにすることで、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施することが目指されている。

このような「幼児期の教育との接続及び低学年における教育全体の充実」を図る主な手だての1つとして、児童や学校、地域の実情を踏まえてスタートカリキュラムを編成することも求めている。スタートカリキュラムは「幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科などにおける学習に円滑に接続されるよう」に、「生活科を中心に、合

科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと」と説明されている。

しかし、文部科学省が都道府県・市町村を対象に調査した「平成28年度幼児教育実態調査」では、幼小接続の状況を6段階に設定しているが、「年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない」（ステップ2）が57.6%を占めており、「授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている」（ステップ3）は18.2%、「接続を見通して編成・実施された教育課程について、実施結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている」（ステップ4）が6.6%に留まっている。この結果からは、交流活動は浸透してきているものの、教育課程の編成・実施まで至っているところはまだ少数という状況であるといえる。

このように地方自治体により取り組みに温度差が見られる要因の1つとして、幼児期の教育を担当する部署の違いが指摘される。冒頭の文部科学省調査では、公立幼稚園と私立幼稚園の担当部署を調べているが、「公立・私立とも教育委員会」が47.7%で最も多

かったが、「公立は教育委員会、私立は首長部局」が21.4%、「公立・私立とも首長部局」が13.3%であった。公立幼稚園を首長部局が所管している場合でも、教育委員会が最終的な意思決定をできるようにするケースが多いが、行政の部署が異なることで接続に対する意識の違いが生じやすいのだろう。

つまり、現状において「幼児期の教育との接続及び低学年における教育全体の充実」を図るスタートカリキュラムは、「カリキュラム」と名付けられているものの教育課程の編成・実施に至っている教育現場はまだ少数であり、後押しする立場にあるはずの地方自治体は、担当部署の違いという組織構造上の課題がある、という点に問題が所在している。

このような問題を改善すると同時に、スタートカリキュラムを単に策定するだけでなく有効に活用するためには、学校長が幼児期の教育の行政体制や施設の実態を踏まえた学校経営方針を策定できるかに懸かっているとみえる。子どもや地域の実態に即したビジョンを形成する能力は、幼児教育との接続という観点からも求められている。

そこで本稿では、2013年度から首長部局に幼稚園・保育所担当部署を一元化し、公立幼稚園・保育所をすべて幼保連携型認定こども園とした静岡市におけるスタートカリキュラムを事例として考察することを通じて、スタートカリキュラム策定に関する示唆を得ることを目的とする。

2. スタートカリキュラムの事例研究¹

蒲原西小学校の実践事例から

(1) 事例校とスタートカリキュラムの概要

特徴的なスタートカリキュラムに取り組む事例校として、静岡市立蒲原西小学校を取り上げる。蒲原西小学校は2011年からスタートカリキュラムに取り組んでおり、2018年で8年目となる。同校は静岡市の東部、旧蒲原町に所在し、導入当時は全学年2学級だったが、2018年4月現在児童178名（1学年平均が約30名）、1～5年生は単学級、6年生のみ2学級の学校規模となっている。2018年度の1年生は7園から入学しており、その多くは学区内に所在している。

当時の資料を基に導入のきっかけを紐解くと、まず、2008年度告示の小学校学習指導要領解説生活科編において「小1プロブレム」などの問題と、その改善策として「スタートカリキュラム」が挙げられたことに触れている²。このことを踏まえ、「これまで、1年生の指導はすべて学年部・学級担任に任せ、担任の教育力に頼りきっていましたが³」という現状を見直し、「これまでのように人的配置による個別的指導を中心に対応するだけでなく、カリキュラムそのものを改善することで『小1プロブレム』を解消させなければな

らない⁴」という機運が高まったことが読み取れる。また、当時参考にしたのは、仙台市のスタートカリキュラムや上越市立大手町小学校の「安心スタートプラン」であったことも示されている⁵。つまり、いわゆる行政主導や施策の流れではなく、現場の必要感から情報収集をして、実施に至ったことが分かる。

同校はスタートカリキュラムに取り組んできた8年間を、大きく2期に分けて分析している⁶。

【第1期】2011年度～2014年度

- ・モジュールなどの導入による入学直後の時間割の弾力的な運用
- ・職員や全学年の児童がかかわる全校態勢を構築
- ・しかし、同校職員は「適応のための特別カリキュラム」の域を出ていなかったと反省

【第2期】2015年度～2018年度現在

- ・近隣園との子どもの交流、並びに職員交流（中学校区）を開始。
- ・(2016～)小学校の長期休業中における小学校職員の保育参観、小学校教員による「出前授業（保育）」
- ・組織的な取組による安心づくりに加えて、合科的・関連的な学習の展開を重視した教育課程の編成（カリキュラムデザイン）を意図

第1期は、1年生の入学直後の適応を意識した、学校内における工夫を重ねたカリキュラム構築に取り組んだ時期であるといえる。それに対して、第2期は学校内だけでなく、学校と近隣園との連携を意識した取組となっており、第1期からの取組をさらに発展させる形になっている。2018年現在、近隣園との交流は以下のように実施している。

表1 2018年度蒲原西小学校と園との交流計画⁷

月	活動	参加者	場所
4	入園式・入学式	園長・校長	各園・校
	授業参観	各園年長担任	小学校
6	生活科授業研究参加	こども園職員	小学校
8	保育参観	小学校教諭	こども園
	中学校区夏季全体研修会	全職員	当番校
10	運動会	校長	こども園
	5年生児童近隣園を訪問	5年生	卒母園へ
11	就学時健康診断	年長児 5年生	小学校
	生活科授業研究参加	こども園職員	小学校
	生活科授業交流	年長児	小学校
	中学校区秋季全体研修会	全職員	当番校
12	出前授業①	教頭・年長児	こども園
	保育参観	小学校教諭	こども園
1	わくわく発表会へ招待	年長児 5年生	小学校
	お散歩①	年長児 1年生	小学校
2	1日体験入学	年長児 1年生	小学校
	お散歩②	年長児	小学校

3	卒業式・卒園式	園長・校長	各園・校
	お散歩③	年長児	小学校

このように、蒲原西小学校が取り組むスタートカリキュラムは内容が豊富なのだが、その中にいくつかの特徴がある。

本稿で取り上げるのは主として以下の2点である。

事例Ⅰ 全校体制で1年生にかかわる「学校スタートカリキュラム」

事例Ⅱ 総合的な学習の時間を活用した年長児と5年生の交流～『かんばら学』単元「小さなこどもとふれあって」～

全国に普及しつつあるスタートカリキュラムでは、入学直後の弾力的な時間割運用や幼児期との接続を重視した学習内容など、1年生単独のカリキュラムであることが多いが、主に取り上げる2つの事例は、いずれも1年生のみにとどまらず、全校や近隣園の活動との連携により相互に教育効果を高める取り組みという点が特徴的である。

(2) **事例Ⅰ** 全校体制で1年生にかかわる「学校スタートカリキュラム」

蒲原西小学校が実践するスタートカリキュラムの第1の特徴として、校内全学年及び職員が1年生にかかわる体制が組まれている点が挙げられる。この取組は同校のスタートカリキュラム導入期から取り組まれており、内容について多少調整はされているものの、現在まで継続されているものである。

① 全校体制で1年生にかかわる「学校スタートカリキュラム」の概要

同校は、全校体制でスタートカリキュラムに取り組むことに重点を置いているという側面から、「学校スタートカリキュラム」と名付けている。

まず、その背景となるスタートカリキュラムにおける時間割の工夫について概要を述べる。蒲原西小学校の職員は「時間の制約や区切りが少ない園の生活から、時間割がはっきりしている小学校への生活への移行は、子どもたちにとっては負担が大きい」と考え、安心して過ごせることに主眼を置いた活動を「なかよしタイム」、合科的・関連的な指導による生活科を中心とした学習を「わくわくタイム」と名付け、一部の時間割をモジュール化し、時間割を編成している(図1参照)。例えば、入学直後の時間割に着目すると、朝の時間と1時間目にまたがる「なかよしタイム」において、健康観察や就学前に慣れ親しんだ絵本の「読み聞かせ」を毎日実施し、習慣化することで、安定した「1日」の学校生活の始まりにつなげている。また、基本的な学校生活に関する流れやルールを指導し、子どもの定着を促す時間を「わくわくタイム」として実施することで、安定した「6年間」(中学校まで見据

えれば「9年間」)の学校生活の始まりにつなげている。また、「～タイム」とネーミングすることで、教師も子どもも見通しをもって取り組めるように工夫されている。

	9日(月)	10日(火)	11日(水)	12日(木)	13日(金)
朝	なかよしタイム健康観察 「あいさつの歌」	健康観察 6年生と遊ぼう 読み聞かせ	健康観察 読み聞かせ	健康観察 読み聞かせ	健康観察 読み聞かせ
1	〇学活2/3 「元氣あいさつ」 「はじめと終わりのあいさつ」 「大きな声で遊ぼう」	〇音楽2/3 「歌」 ※学級写真	〇国語1 「どうぞよろしく」(カードづくり)	〇学活2/3 「遊藝訓練」って何かな?	〇国語2/3 「あさ」 ・本を読んでみんなで遊ぼう。
2	わくわくタイム 〇生活2 1年生の教室 廊下・トイレ 整頓・卓立て 学活室 生活科室	なかよしタイム 〇国語(書写)1 「えんぴつで字を書こう!」 あたらしいひらがなを2年生に聞いちゃおう。	体育測定	わくわくタイム 〇生活1 「なかよしタイム」 「いたいてくせしめ」	なかよしタイム 〇音楽1 「3年生と校歌を歌っちゃおう」
3	ロッカー・書箱 ※男女別に指導 あわせて大型絵本の「読み聞かせ」を実施 ※級外がつく	〇体育1 「書箱を置いて体育館に行こう」 「体育館で運動遊びをしよう」	行事2	〇遊藝訓練 「地盤が来たときの運動場への避難」	〇体育1 「背の順にならびっこしよう」

図1 モジュール化された4月上旬の時間割⁸

次に、時間割の内容に着目すると、「あたらしいひらがなを2年生に聞いちゃおう」「3年生と校歌を歌っちゃおう」など、1年生以外の学年が示されていることがわかる(図1囲み部分)。あらかじめかわる学年と期日・期間、かわる際の1年生の学習内容を一覧化しておくことで、年度当初の繁忙期でも取り組みやすい形となっている。前述の「一部の時間割のモジュール化」は、これまで他の事例でも見られる、いわゆるスタートカリキュラムの主流ともいえる手だてだが、他の学年、しかも全学年を意図的に交流対象として位置付けている点が特徴的である。

表2 2018年度 各学年の1年生との交流予定⁹

学年	期日・期間	内 容
6年生	4月 5日(木)	入学式準備
	4月 6日(金)	入学式
	4月 9日(月)～27日(金)	登校後の朝の支度・自由遊びの見守り くつばこ・傘立て・机の中・ロッカーや遊具の安全使い方について同行して見守る
	4月11日(水)～27日(金) 12:55～13:05	給食の片付け補助(3名ずつ輪番) 給食の片付けから下校への流れの一部を補助
2年生	4月10日(火)	2校時 新しい「ひらがな」を書こう
5年生	4月17日(火) 清掃時間帯	1年教室・廊下の清掃の仕方を知ろう 黙って掃除をしよう
4年生	4月18日(水)	安全な遊具の使い方をしよう あさがおの植え付けをしよう
3年生	4月13日(金)	「校歌」「学校坂道」を覚えよう
全学年	4月26日(木)	「わくわく入学式」(1年生を迎える会)

加えて、これらスタートカリキュラムに関する取組は4月当初の職員会議の議題に位置づけられており、全職員が取組について検討すると同時に、新任職員も蒲原西小学校のスタートカリキュラムを把握することができる仕組みとなっている。

同校の「学校スタートカリキュラム」における特に着目すべき教職員として、級外の教務主任や養護教諭の存在がある。モジュール化した朝の「なかよしタイム」において1年生担任と一緒に子どもの健康観察や実態把握をしたり、支援をしたりしている。とりわけ教務主任がかかわる意義は大きく、学校の教育課程編成を司る教務主任が1年生の実態とスタートカリキュラムの実際を目の当たりにすることで、実践後の改善につなげやすいという面がある。つまり、教務主任がかかわることで、スタートカリキュラムの「計画・実践・評価・改善」というPDCAサイクルを促進するだけでなく、子どもへの「支援」という面の充実へもつながっているといえる。

②取組によるメリットや教育効果

この手だてによるメリットは大きく2点挙げられる。1点目は、1年生が上級生と授業の具体的な活動を通して接する場となっていること、2点目は、1年生以外の学年を担当した職員でも、職員会議や自身の担当学年の子どもが1年生と交流することを通して、1年生の実態及びカリキュラムが具体的に把握できるシステムとなっている点である。



図2 1年生に校歌を教える3年生

加えて、生活科の学習として「なかよしっばいだいさくせん」が位置づけられている（図1破線囲み部分）。年間を通して「なかよし」を増やしていくという単元構成になっているが、図1の週（4月第2週）における「なかよし」は「教職員」を指しており、年度当初に1年生が「せんせいたちとなかよしになる」ことを目的に、級外及び他学年の教職員と交流しに行き、教職員を把握する機会としている。



授業公開時の教師（T）と子ども（C）の表れ（2018年4月19日）
T：何でなかよしなのかな。
C：大きい声でおはようって言うってくれるから
C：見に来てくれるから

図3 「なかよしっばいだいさくせん」の様子

この取組により、1年生の「安心感」につながるだけでなく、他学年を含めた学校体制としての「スタートカリキュラム」につなげている。

この取組について、同校のスタートカリキュラム研究会（2018年4月19日）における、参加者や関係者の言葉から教育効果を垣間見る。まず、1年生の「安心感」に関する効果について、1年生担任のS教諭は以下のように述べている。

子どもは「なかよしがふえてうれしい」と言っている。スタカリ（スタートカリキュラム）があったから、たくさんの先生とも仲良くなれた。

加えて、その様子を参観した1年生の年長時の担任は、以下のように述べている。

研究授業見させてもらったときの「先生と仲良くなろう」みたいな活動をしていて、いろんな人とかかわれて、ここは自分の居場所、みたいな。知らない人もいて、先生の数も全然違うと思いますし、めったに会わない先生もいるじゃないですか。そこで先生たちを知って、どこにいても知っている人がいるっていう安心できる場っていうのが、こういうので作られているんだなって思いました。

年度当初に、他学年の子どもや教職員とかかわったことの良さを端的に表した言葉であるといえる。また、ある参加者は、事後アンケートに以下のように記述をしている。

他学年や、全職員が力を合わせて見守る雰囲気がよい。

これは、参加者の目から見ても、スタートカリキュラムに小学校全体で取り組んでいる様子が分かることを、端的に表しているといえる。加えて、全学年が1年生にかかわる、文字通り「全校体制」としてのスタートカリキュラム化について、Y校長は以下のように述べている。

1年生から見ると、「何年生には何々を教えてもらった」となっている。これは担任同士が仕掛けている。3年生担任に「この時間、歌っていてね」と（事前に）伝えておく。1年生が散歩し、歌を聞くことで1年生から「教えて」という流れになる。3年生もいい加減な歌は歌えない。

このことから、1年生の子どもだけでなく、3年生の子どもにとっても上級学年という立場を自覚し、1

年生に教えるという過程を意欲付けに生かしていることが伺える。つまり、第一義的には1年生のためのスタートカリキュラムではあるが、他学年にとっても相互に教育効果を高める構造となっている。

さらに、この取組は同校スタートカリキュラム導入当時においても教育効果を挙げている。以下は、当時の教育実践論文¹⁰に示された成果の抜粋である。

- ・昨年度は、学校生活に不適應を起こした児童が複数出た。(中略)しかし、本年度の1年児童には、こういった問題は全く起こらなかった。
- ・教師側が願っていた以上の大きな成果を得ることができた。3年児童の自信に満ちた歌声の響き、飼育動物の命名や朝顔の栽培に積極的にかかわった4年生、自らの取組姿勢をも変えた5年生の清掃など、スタートカリキュラムへのかかわりを通して大きく成長した姿を見ることができた。
- ・2学年以上の担任は、カリキュラムの主旨をよく理解し、それぞれの学年の特長をカリキュラムに反映させることができた。

つまり、同校におけるスタートカリキュラムは、学校全体で取り組むスタートカリキュラムとして組織化され、「学校スタートカリキュラム」とその名前を変えるなどの調整や改善を繰り返しながら8年間その教育効果を発揮し続けてきたことが伺え、単発ではない、持続可能な取組とされてきたことが分かる。

(3) 事例Ⅱ 総合的な学習の時間を活用した年長児と5年生の交流～『かんばら学』単元「小さな子どもとふれあって」～

蒲原西小学校が実践するスタートカリキュラムの第2の特徴として、年長児と5年生との交流が、5年生の総合的な学習の時間に位置づけられていることが挙げられる。この取組は、同校のスタートカリキュラム第2期から取り組まれている。

① 1年生のスタートカリキュラムと5年生の総合的な学習の時間との連動

毛利(2012)¹¹が『縦割り班』活動や『ペア学年』『兄弟学級』の活動の取り組みは、子どもの健やかな成長を願う教師たちの、それぞれの学校の創意工夫を生かした教育活動として、1970年代の末頃から全国の小学校に広がっていったものであり、筆者が平成14年に調査した時点で、9割近い小学校で実践されていた」と指摘するように、特別活動における異学年交流の1つとして「ペア活動」を位置付け、1年生と6年生がペアとなって様々な特別活動に取り組むという光景は、小学校ではいわば「当たり前」のこととなっている。また、年長児が入学前に実施する就学時健康診断において、健康診断がスムーズな実施に向けた補助的な役割と同時に、翌年度の1年生と6年生のペア活動を見越して、5年生を補助的に年長児に引

き合わせる小学校も多く見られる。

また、事例校は1～5年生が単学級、6年生のみ2学級という規模であり、多様な価値観を持つ子どもたちに触れる目的から、異学年との交流を充実させている。これは、前出の毛利が述べる「1学年1学級のいわゆる単学級の学校(小規模校)ではクラス替えがないように、児童数が少なくなると、どうしても『集団に揉まれる』ことがなくなってくるので、『異年齢集団による交流』に取り組むことの意義が大きい」とことと重なる。

この異学年によるペア活動、1年生にとっては6年生とのペア活動という取組や入学前の就学時健康診断という取組と、相互に生かす形で、5年生後半の総合的な学習の時間において「小さな子どもとふれあって」という大単元を位置付けている。年長児、つまり次年度の新1年生は、入学前に5年生とかかわることで入学へ向けた安心感につなげることができる。

この取組も前述の(2)のように、1年生と5年生にとって相互に教育効果を高める構造になっている。まず、5年生の総合的な学習としての取組の概要について述べる

5年生は、「未就学児と接したり、遊んだりする」という活動を介して、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」「振り返り・考えの更新」という「探究のサイクル」を繰り返していく授業の構成となっている。具体的には、未就学児の発達段階や子育ての在り方、保育制度、地域の子育て支援などのテーマを5年生は設定している。

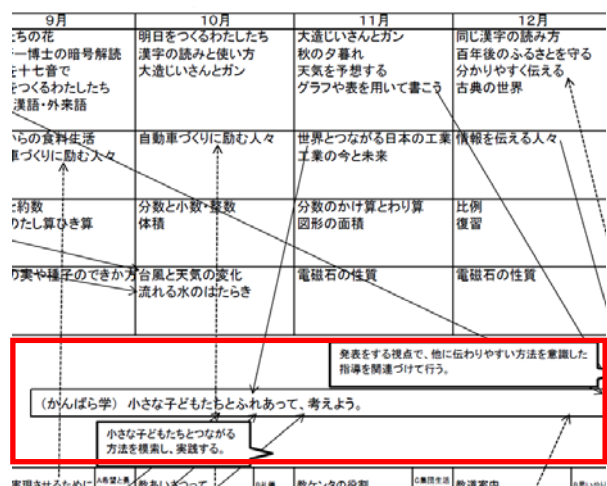


図2 総合的な学習の時間における位置付け¹²

② 活動の様子と子どもの表れ

交流活動として、5年生の子どもは就学時健康診断前に、自分の卒母園を中心に複数回訪問し、職員へインタビューをしたり、園児と遊んだりする。本稿はスタートカリキュラムとして取組を取り上げているため、5年生の総合的な学習としての面は、エピソードを検

討することで、年長児との交流の価値を質的に垣間見る。

【B子のエピソード(2018年10月26日)】

5年生が近隣園に1回目の訪問をし、園長インタビューを実施した際の様子である。

C子「子どもが嫌がらないようにしていることはありますか。誰でも失敗することはあると思うんですけど、なるべく失敗しないようにとか。」
園長「なるべく先生たちは子ども一人一人を見るようにして、この子はきっとこういうのが好きなんだろうなって、考えるようにしています。『見立て遊び』って知っていますか。」
B子やC子は10秒ほど沈黙。その後、園長が「見立て遊び」について説明

予定していた質問をしたところ、知らないことを質問されて返答に窮していた様子が伺えた。その後、年長児との交流などをした後に帰校し、振り返りの授業に取り組んでいる。以下はその一部分である。

D子「言葉や数の学習をしていました。」
E男「本格的な勉強とは違うけど、歌を歌ったりしていました。」
B子「『見立て遊び』っていうのがあって、例えばあるものを建物に見たてたり、車に見たてたり、電車にもなる…子どもが自分で想像して遊ぶっていうのを聞きました。」(「そうそう」と、B子と同じ園に訪問したC子たちから同意の声)

園長インタビューの際は返答に窮したはずの「見立て遊び」についての発言が気にかかったため、筆者はB子にその意図について尋ねた。

筆者「何で『見立て遊び』について発表したの」
B子「Y園さんやX園さんのは言語とか算数とかだったけど、『見立て遊び』は(それらの学習とは)ちょっと違う。でも、それも大事だと思ったから」

つまり、B子は「言葉」や「数」の学習と比較し、「遊び」を通した学びという、幼児期ならではの学びの特性に気付き始めていたといえる。また、B子の説明は園長の説明に比べ、「見立ての具体例」が充実している。約2時間前の訪問時には「見立て遊び」を知っている様子は確認できなかったことから、訪問時のインタビューにおいて「見立て遊び」という新しい情報を知り、その後園児の遊びを間近に見ることによって情報収集を充実させ、振り返り授業の中で、幼児期の「遊び」を「学習」として分析していることが伺える。

年長児の入学後を見越した5年生との交流という側面と、5年生の総合的な学習の教材価値としての側面、その両面を有した取組の効果が見受けられた場面であり、年長児と5年生の双方にとって教育効果が期待できる取組であるといえる。

(4) 年長時の担任から見る教育効果

前述の事例Ⅰや事例Ⅱを中心に、同校のスタートカリキュラムにおける取組が、校内全体や、特に5年生の学習と相互に教育効果を高める取組を含んでいるとして検討してきた。しかしながら、この接続期の取組については、質問紙調査があまり適切でない発達段階だったり、子どもの入学前と入学後で指導者が変わったりと、評価が難しい側面を有している。そこで本研究では、Z園にて年長児を担当し、その年長児が1年生となった様子を定期的に見る機会があったF保育教諭とZ園園長に、同校のスタートカリキュラムの効果についても含めて聞き取り調査を実施した(2018年11月16日)。Z園は、同校が最初に交流を始めた園であり、同校から比較的近い位置に立地している。

聞き取り調査は、半構造化インタビューの手法を用いて、約1時間実施した。

まず、園の職員から見た、1年生の適応の面に関する様子的見取りである。

2	加藤	率直にこの時(4月12日の新入生年長時担任による小学校訪問) どうでした?
3	F	入学して間もないころだったので、どうかなあって思いながら自分も行ったんですけど、僕の顔見たら「あっ、来てくれたんだ」というような笑顔を見れて、やっぱり今まで人数の少ないところで生活してきて、小学校で急に人数が増えて、ちょっと心配になりながら行ったんですけど…(中略) その中に一緒に入って、話を聞いたとか、生活している姿を見たりとかして、「あ、一緒にいられるんだな」というのは一つ安心したっていうところはあります。また、なんか、Zの子たちでかたまるともなくて、他の園から来た子たちとも一緒に座ったりっていうこともあったので、かかわりが少しずつ出てきたんだなあっていうのも、安心したかなあって思います。

27	加藤	割と定期的というか、ちょくちょく会っていらっしゃるわけじゃないですか。いつくらいから変わる期間?
28	F	どうなんですかね…そうですね、秋はもう違ったかな。もう「お兄さんだよ」と顔はしてました。4月行ったときはやっぱりまだ年長さんっぽくて、やることも絵本読んだり手遊びやったりっていう楽しむ内容も、年長さんの時の名残があったと思うんですけど、(5月末の)運動会見させてもらったときに、練習もちょっと見させてもらったりしたんですけど、こう「ぼくたちはもうやるから(手で制するしぐさ)」と、見てて、もう「やるよ!やるよ!」って

29	園長	ぼくたちもう1年生だよって感じで
30	F	4月は(自分のところに)集まってきて「おお」なんてやってたんですけど、この時はもう「見ててね」みたいな。

F 保育教諭と園長の見取りでは、4月から5月末の運動会、秋ごろにかけて、1年生が順調に適應していると受け止めていることが分かる。また、小学校に適應するだけでなく、園の時にはあまり見られなかった子どもの表れを見取っている。

41	F	そうですね去年の子(現1年生)たちは、(小学校で)自分から手を挙げたりとか、運動会の開会の言葉言ったりとか…そういう積極性は、(小学校の先生から)話聞いててもすごいんだなあって。
42	加藤	あまり園の時は感じなかった？
43	F	係の仕事とか、前に出てやるとかはあったんですけど、大勢の中に行くと「負けちゃう」んじゃないかなってという心配もあったんですけど。

55	F	やっぱり、自分の思いを出せないっていう子もいたんですけど、人前で発表するの苦手だったりとか、ちょっと言われると引込んでしまったりとか。その子は小学校に行くと、言葉も、話し合いをしてても伝えようとしていて、手を挙げようとしていたりっていう姿もあったし…。
----	---	--

このF教諭の見取りから、何人かの子どもが、運動会があった5月末までに、園ではあまり見られなかった積極性を発揮するに至っていることが分かる。小学校生活に適應するだけでなく、園とは違った環境で、短期間ながら変容していることが伺える。また、「安心」というキーワードは、子どもに対してだけではないことについて、F 保育教諭は以下のように述べている。

59	F	最初(4月)にこども園でやっていたことから入ってくれているっていうのが、この園に来てぼくにとって衝撃的でした。小学校に行けば最初から授業っていう頭でいたんですけど、手遊びとか絵本から入って、ちょっとずつ授業に入っていく、遊びから入っていくっていうのは、最初はホントに安心できるんだなって感じました。
60	加藤	この安心は、子どもが安心できる？
61	F	はい、子どもが。
62	加藤	F先生も安心できる？
63	F	そこも、入るときの段差が少ないっていうか、ちょっとずつ慣れていけるっていうところは安心しました。

子どもだけでなく、園の職員にとってもスタートカリキュラムが安心材料となっている、ということがわかる。また、小学生との交流が、年長児の保育の充実へつながっている、ということについて、F 保育教諭

は以下のように述べている。

20	F	この前も西小(の1年生生活科)で「秋の商店街」ってやっていたのに招待してもらって、年長と一緒にやってきたりとか。今、この年長もお店屋さんごっこをすごく楽しんでいて、(中略)お買い物させてもらった後に「今度1年生も招待したい」ってことも言い始めて。
----	---	---

92	加藤	心配だって言っている子は？
93	F	いないですね。もうだいぶ慣れてますし、(学校に)行って、(1年生生活科の)商店街のお店屋さんで買い物させてもらったりとかっていうのもあって、小学生とかかわるっていうのも、おにいちゃんおねえちゃんに憧れみたいなのもってますし、一緒に遊びたいとか…だから今回も呼んでみたいっていうのにつながったのかなっていうのはあります。
94	加藤	これは…すごいですね。生活科の何かをやろうとしたときに、園児を呼ぼうって試みているところはちょいちょいあるんですけど、それが園児にとっていいかどうかはクエスチョンなんです…人数は少ないかもしれないですけど、Z園の子にとって良かったっていうのは、「子どもが行きたい」って言っている事例として自信をもっていえるかなって。
95	園長	子どもたちが園でしている遊びとリンクしているっていうところがあります。今「お店屋さんごっこをやりたいね」って言って、お店屋さんの準備をしている時期に(小学校から)呼んでくれるってことだったので、ぜひって。1年生のやっているお店屋さんの種類を見て、「自分たちにはないものがある」っていうのがわかって…アクセサリーとか作ってなかったんですね。そこで指輪とかネックレスをつくらうっていうのにつながったし、やっぱりアンテナの高い子って、「自分たち呼んでもらったから、今度は1年生呼ぼうよ」ってぱっと言葉で出たものだから…そこは聞き逃さないようにしました。小学校の先生に連絡したら「いいですよ」って…(中略)1年生を呼ぶってことが現実化してくると、子どもも励みになって…今までって、小学校からのお誘いに乗るばかりだったので、何かチャンスはないかって。こちらからのアプローチをして、お互いに、働きかけたり、働きかけてもらったりっていう関係もいいのかなって私は思ったので。

1年生の生活科に年長児を招くという取組の、当初

の目的は、まず、1年生の生活科における「秋の商店街」を通じた学習の充実のためというメリットがあった。同時に、年長児が入学後の見通しをもてるというメリットが想定され、1つの取組による教育効果を相互に生み出すというものだったと推察され、おそらくその目的は達成されていることは想像に難くない。加えて、同時期に年長児が遊びとして取組「お店屋さん」に取り組んでいたことで、「1年生の工夫を遊びとして取り入れる」「1年生を園に招く」という年長児の発想につながっており、年長児の遊びの充実にも派生していることが分かる。

3. 本研究における考察と示唆

本研究では、事例研究を通して今後のスタートカリキュラムの発展性の端緒を切り出した。今回の事例校において特徴的かつ新規性が見られた事例Ⅰ全学年が1年生にかかわる体制、及び事例Ⅱ総合的な学習の時間を活用した5年生と年長児の交流という2つの取組は、いずれも1年生のためのスタートカリキュラムというだけでなく、1年生を軸として、他学年や園児を含め、多角的にかつ相互に教育効果を高めるスタートカリキュラムとなっていたといえる。また、このような全校体制や園との交流まで含めたスタートカリキュラムを推進していることで、1年生担任以外の教員も取組を介して1年生の実態やスタートカリキュラムを把握することができ、持続可能な組織体制の構築にもつながっている。それは、事例校の蒲原西小学校が、学校独自のスタートカリキュラムを8年間継続し、教育効果を挙げ続けてきた実績からも伺うことができる。

課題として、他校で援用しようとする際に、発案時期や推進者を明確にしにくいという点が挙げられる。スタートカリキュラムは主に年度初めの取組であるが、人事異動や校内配置が未確定の年度末に検討するのは難しい場合がある。導入する際は、前年度のうちに校内で提案・周知しておくこと、教務主任がイニシアティブを取ることが妥当であると考えられるが、この辺りは各校の実情に合わせた発案や導入方法を検討する必要があるだろう。

近年、「カリキュラム・マネジメント」の重要性が謳われている。田村(2011 p.2)は「カリキュラムマネジメントとは、各学校が、学校の教育目標をよりよく達成するために、組織としてカリキュラムを創り、動かし、変えていく、継続的かつ発展的な、課題解決の営みである¹³⁾」と説明している。本事例は、スタートカリキュラムを学校全体で取り組むカリキュラムとして位置付け、実践し教育効果を上げるだけでなく、改善を重ね、継続的な取組としている好事例であり、いわばスタートカリキュラムがカリキュラム・マネジメ

ントされている事例であるといえる。

本事例研究は、今後、スタートカリキュラムを学校全体のカリキュラム・マネジメントに内包していくことで、入学直後の1年生に限らず、学校全体及び園への教育効果を高める可能性を示唆しているとい

¹野村康『社会科学の考え方』(2017名古屋大学出版会)では、事例研究を「ある事象や人々の、学術的に有意義な側面を何かの重要な例として考察し、その研究分野に貢献する取り組み」と定義している。本研究では、フィールドワークより明らかになった事象から「教育効果を相互に高める組織化されたスタートカリキュラム」を「学術的に有意義な側面」として考察する。

²2008年告示の学習指導要領生活科編「改善の基本方針」に「小1プロブレムなどの問題が生じる中、小学校低学年では、幼児教育の成果を踏まえ、体験を重視しつつ、小学校生活に適應すること、基本的な生活習慣などを育成すること、教科などの学習活動に円滑な接続を図ることなどが課題として指摘されている」、同「内容及び内容の取扱いの改善」に「学校生活への適應が図られるよう、合科的な指導を行うことなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善することとした」と示されている。

³蒲原西小学校 田中徹(2011)「平成23年度 静岡市校長会 清水区小学校部会資料」

⁴蒲原西小学校(2011)「新しい教育環境への適應を重視したスタートカリキュラムの編成」静岡県教育弘済会教育実践論文

⁵前掲 蒲原西小学校 田中徹(2011)

⁶蒲原西小学校(2018)「スタートカリキュラム作り研修会」資料を基に筆者整理

⁷同上資料より引用

⁸同上資料に、囲み部分を筆者加筆

⁹同上資料より引用

¹⁰前掲 蒲原西小学校(2011)

¹¹毛利猛(2012)「小学校における『異年齢集団による交流』の取り組みに関する研究：香川県下の取り組みの現状と教員の意識に関する調査を手がかりに」日本教育学会大会研究発表要項 pp.366-367

¹²蒲原西小学校 山口恭正(2018)「静岡市校長会 小学校部会提言資料」に、囲み部分を筆者加筆

¹³田村知子編著(2011)『実践・カリキュラムマネジメント』ぎょうせい p.2

謝辞

本研究にご協力いただきました、静岡市立蒲原西小学校及びZ園の職員の皆様に感謝申し上げます。